

[成果情報名]促成栽培ミニトマトに発生するオンシツコナジラミの黄色粘着トラップを利用した物理的防除

[要約]促成栽培ミニトマトにおいて、黄色粘着トラップによる大量誘殺法は、オンシツコナジラミの防除技術の一つとして有効である。

[キーワード]黄色粘着トラップ、オンシツコナジラミ、ミニトマト、物理的防除

[担当]徳島農総セ・農研・病害虫担当

[代表連絡先]電話 0883-24-2217

[区分]近畿中国四国農業・生産環境（病害虫）

[分類]技術・参考

[背景・ねらい]

コナジラミ類は黄色に誘引されることから、黄色粘着トラップはコナジラミ類の発生を把握するための有力なモニタリング技術として利用されている。また大量誘殺による密度抑制効果が普通期栽培のトマト（近藤ら、1995）やインゲン（北方・吉田、1982）で検証されているが、促成栽培ミニトマトでの検証はされていない。

そこで促成栽培ミニトマトに発生するオンシツコナジラミに対して、各種防除技術の中に黄色粘着トラップによる大量誘殺法を組み込んだ場合の防除効果を検証する。

[成果の内容・特徴]

1. 本県の促成栽培ミニトマトではオンシツコナジラミは春先以降の密度が急増する傾向が見られる（図1、2）。同時に発生するタバココナジラミは定植直後に密度のピークが見られるが、その後春先以降も低密度で推移する（データ省略）。
2. 黄色粘着トラップを畝上の頂葉付近の高さに5株に1枚の割合で吊り下げると、頂葉に寄生するオンシツコナジラミ成虫数は低く推移する。トラップ設置区でのオンシツコナジラミの頂葉における累積寄生成虫数は、無処理と比較して30%前後である（図1、2）。
3. 春先以降はオンシツコナジラミの密度が急増するが、粘着トラップの設置によりオンシツコナジラミの密度増加を遅らせることができる（図1、2）。

[成果の活用面・留意点]

1. 黄色粘着トラップによるコナジラミ類の大量誘殺は、促成ミニトマト栽培以外の施設栽培野菜類でも利用可能である。
2. 本誘殺法は他の防除手段と組み合わせて利用することが重要であり、粘着トラップ設置のみでは防除効果が不十分な場合がある。
3. 黄色粘着トラップは商品によってコナジラミ類に対する誘引性が異なると考えられるため、利用に当たってはメーカーや指導機関等の意見を参考にする。

[具体的データ]

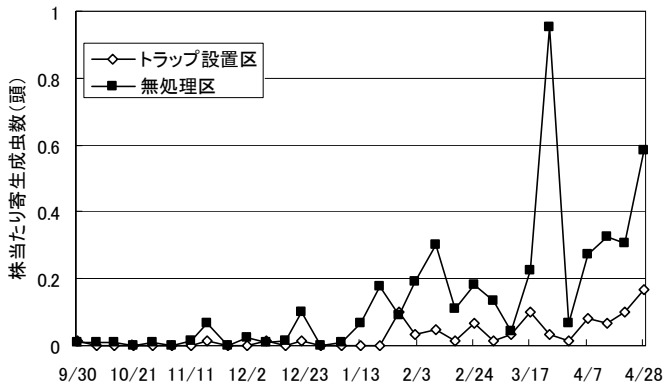


図1 Aハウスにおけるオンシツコナジラミの上位葉寄生数推移 (2008年)

阿波市土成町岡の段にあるミニトマト栽培施設を供試した。品種はキャロルクイーンで、2008年8月29日に定植した。1区520㎡の2連制で、株間60cm、2条植えで試験を行った。ハウスサイドには2~4mm目合い乱反射不織布折り込みネットが展張され、ハウス周囲には乱反射シート(商品名:タイベック)が敷設されていた。

粘着トラップ(バグスキャン、25cm×40cm、東海物産社製)を5株に1枚(約1.5m間隔)の割合で頂葉付近の高さに垂直に吊り下げた。

調査は約7日間隔で、10株おきに頂葉付近5複葉に寄生するコナジラミ類成虫数を種ごとに見取り調査した。

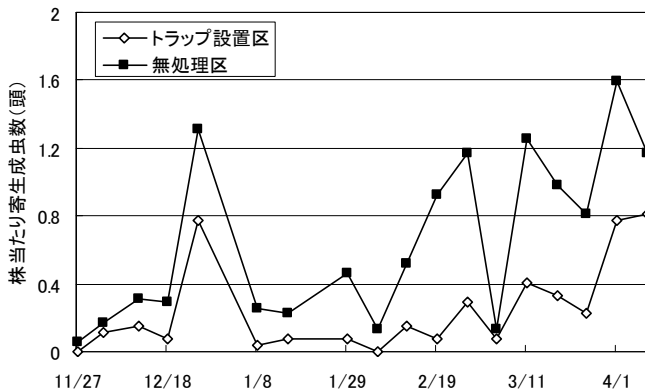


図2 Bハウスにおけるオンシツコナジラミの上位葉寄生数推移 (2007年)

阿波市土成町吉田にあるミニトマト栽培施設を供試した。品種はキャロルクイーンで、2007年9月4日に定植した。1区1000㎡の1連制で、株間55cm、2条植えで試験を行った。ハウスサイドには1mm目合い防虫ネットが展張されていた。

粘着トラップ(New金竜、5cm×50cm、丸善薬品産業社製)を5株に1枚(約1.4m間隔)の割合で頂葉付近の高さに垂直に吊り下げた。

調査は約7日間隔で、10株おきに頂葉付近5複葉に寄生するコナジラミ類成虫数を種ごとに見取り調査した。

表1 Aハウスの防除歴

日付	薬剤名	日付	天敵名
8/30	ジノテフラン粒剤	3/11	オンシツツヤコバチ
9/16	オレイン酸ナトリウム液剤	3/18	オンシツツヤコバチ
9/24	エマメクチン安息香酸塩乳剤		
9/28	ボーベリア・バシアーナ乳剤		
10/7	ボーベリア・バシアーナ乳剤		
10/17	エマメクチン安息香酸塩乳剤		
	BT水和剤		
10/25	ボーベリア・バシアーナ乳剤		
12/4	オレイン酸ナトリウム液剤		
1/25	オレイン酸ナトリウム液剤		
2/28	オレイン酸ナトリウム液剤		
3/11	オレイン酸ナトリウム液剤		
3/26	オレイン酸ナトリウム液剤		
4/12	オレイン酸ナトリウム液剤		
5/9	ボーベリア・バシアーナ乳剤		

オンシツツヤコバチは3500頭/10a・回の放飼密度であった。

表2 Bハウスの防除歴

日付	薬剤名	日付	天敵名
9/5	ジノテフラン粒剤	10/11	オンシツツヤコバチ
9/26	ピリダリル水和剤		ハモグリミドリヒメコバチ
	TPN水和剤	3/11	オンシツツヤコバチ
10/5	ピメトロジン水和剤	3/18	オンシツツヤコバチ
	ミルベメクチン乳剤	3/25	オンシツツヤコバチ
11/2	ピリダリル水和剤	3/25	サバクツヤコバチ
11/25	脂肪酸グリセリド乳剤	4/1	サバクツヤコバチ
1/6	オレイン酸ナトリウム液剤	4/8	サバクツヤコバチ
2/1	オレイン酸ナトリウム液剤		
2/22	脂肪酸グリセリド乳剤		
2/27	オレイン酸ナトリウム液剤		
	ピメトロジン水和剤		
4/27	オレイン酸ナトリウム液剤		

オンシツツヤコバチは約2800頭/10a・回

ハモグリミドリヒメコバチは約100頭/10a・回

サバクツヤコバチは約2800頭/10a・回の放飼密度であった。

[その他]

研究課題名：施設トマトにおける IPM 技術の確立

予算区分：県単

研究期間：2008～2009 年度

研究担当者：須見綾仁、南利夫、松崎正典、阿部成人